

ソウ 4

2008(平成20)年2月16日鑑賞(ホクテンザ2)

★★★



監督＝ダーレン・リン・バウズマン／脚本＝パトリック・メルトン／マーカス・ダンスタン
／出演＝トビン・ベル／ベッツィ・ラッセル／スコット・パターソン／アスィナ・カーカニ
ス／コスタス・マンディラー／リリック・ベント (アスミック・エース配給／2007年アメリカ
映画／93分)

……ひよんなきっかけで、『ソウ4』を鑑賞。予備知識ゼロで観たのが良かったようで、その残忍さにまずは大ショック！そして、恐る恐る観ているうちにそのゲーム性に魅了され、『ソウ』(04年)、『ソウ2』(05年)、『ソウ3』(06年)をにわか勉強した結果、『ソウ』シリーズの人気の秘訣に迫ることに大成功！こりやすごい！こりゃ面白い！そしてこりゃ怖い！しかし、『ソウ5』『ソウ6』への期待は高まるばかり……。

予備知識ゼロで、はじめて『ソウ4』を

基本的にホラー映画嫌いの私は、『ソウ』シリーズが若者に大人気だということは知っていたが、あえて観に行く必要はないと考えて、『ソウ』(04年)、『ソウ2』(05年)、『ソウ3』(06年)を全然観ていなかった。しかし今回、たまたまうまく時間がフィットしたため、『ソウ4』を観に行くことに。

普通は、事前にネット情報を集め、ある程度情報を持った状態で試写室あるいは映画館へ行くのだが、そんなわけで今回は予備知識ゼロではじめて『ソウ』シリーズの第4作『ソウ4』を鑑賞することに。途中何度も目を覆いながら観ていたが、そのものすごさに集中度はバッチリ。そして、鑑賞後は『ソウ4』のパンフレットをかじりつくように読んだし、『ソウ』1～3についてもネット情報を集めて一気に勉強。したがって、以下の評論においては、予備知識ゼロで『ソウ4』を観た驚きと、にわか勉強の成果を合わせて書きたい。

冒頭シーンはほとんど目を覆った状態で……

冒頭、手術台の上にあるのはおじさんの裸体死体。私は司法修習生時代にカリキュラムの1つとして死体解剖に立ち会ったことがあるが、そこでわかったのは、私は絶対医者には向かない人間だということ。つまり私は、血やあの死体の臭いが絶対イヤなのだ。

ところが、この冒頭シーンはまさに人体解剖そのもの。誰が、何のために、誰の死体をこれほど入念に切り刻んでいるのか全然わからなかったうえ、頭を切り取り、胸を切り取っていくシーンは全然直視できず、目を覆っている状態。そのため、「しまった。やはり別の映画を観た方がよかった」と後悔したもの。

後で勉強したところによると、この死体こそ『ソウ』シリーズの主演ながら、ついに『ソウ3』で死んでしまったジグソウ（トビン・ベル）。主演ジグソウの死亡によって『ソウ』シリーズは終了し、もし『ソウ4』がつくられるとしても、それはレクター博士の若き日を描いた『ハンニバル ライジング』（06年）のように、時代をさかのぼり、若き日のジグソウの姿を描く企画しかないだろうと思われていたらしい。ところが、何と『ソウ4』で新たに脚本を任されたパトリック・メルトンとマーカス・ダンスタンの新コンビは、ジグソウの胃袋の中から発見された蠟で固められたカセットテープから物語をスタートさせるという大胆な試みを……。

そのカセットテープが語るのは、「刑事、これを聞いているということは君が最後に残った人物ということだろう。私の死で、全てが終わったと思っているかもしれない。だが、それは間違っている。私の仕事は続く。ゲームは始まったばかりだ」というもの。ここまでの導入部を観ると、『ソウ』シリーズを全く知らなかった私も「なるほど」と納得……。

次のシークエンスでも、恐い死体を……

『ソウ』シリーズの特徴の1つが、モノトーンのざらついた画面と不安定な画像の揺れそしてスピーディーなカット割りにあることは、しばらくスクリーンを注視しているとわかってくる。そんな『ソウ4』は、冒頭の下肝を抜かれる気味悪い解剖シーンに続いて、鎖に繋がれた状態で胸を大きくえぐられた女の死体と、そこに刑事たちが集まってくるシークエンスが登場する。

もちろんこれを観ている時は登場人物たちの名前と役割は認識できなかったが、後でわかったのは、この死体は『ソウ2』『ソウ3』に登場した女刑事ケリーで、これを発見したのは『ソウ3』から登場したホフマン刑事（コスタス・マンディラー）と『ソウ2』から出演しているSWATの隊長リッグ（リリク・ベント）。また、それに続いてこの現場に登場するのは、FBI捜査官のストラム（スコット・パターソン）とそのコンビの女性捜査官ベレーズ（アスィナ・カーカニス）だ。

リッグ隊長が自己の危険を省みず現場に突入したのは捜査の常道から外れているが、同僚たちが次々と無惨に殺されていく様子を見て、多少正常な気持を失ったのは仕方なし……？ もちろん、ケリー刑事の死亡についてリッグ隊長には何の責任もないのだが、自分が何かしていればと考え気分が落ち込んだのも仕方なし。また、リッグ隊長が何とか自分の力で犯人を逮捕したいと執念を燃やし始めたのも仕方ないとしても、家庭を犠牲にしてまでそんな危険な任務にのめり込む彼に妻はおかんむり。そのため、口論(?)の挙げ句、妻は1人で家を出て行く羽目に。そして、1人リッグが残った家の中ではとんでもない事件が……。

『ソウ』シリーズは「ゲーム」感覚で進行！

夜中に物音を聞きつけ、拳銃を手に玄関に向かうリッグ隊長だったが、予想どおり、ワケのわからない展開で何者かに襲われてしまった。さてどうなるのか、と固唾を呑んで見守っていると、次は自宅バスルームで目覚めるリッグ隊長のシーン。ドアを蹴破って外に出ると、そこには奇妙な装置がいっぱい。そして、テレビモニターに映るのは、奇妙な人形の姿だ。その人形が語るのは、「ハロー、リッグ。再生の道へようこそ。数年間、君は仲間の死を目撃し続けてきた。君は生き残った。だが、君は執念に取りつかれ、正しい選択ができなくなった。君は救えない者を救おうと無駄な努力をしている。今夜その執念と向き合う機会を与えよう」という挑発的なものだった。

また、モニターの次のシーンは、鎖につるされた男と、その側に座らされている男。これも後にわかったことだが、この2人は失踪したまま消息不明となっていたエリック刑事と先ほど別れたばかりのホフマン刑事。そこでテープが語りかけるのは、「彼らの命は君の執念のあり方にかかっている。助けたいなら執念を捨てる。選択は君次第だ」というもの。そして、ゲームに要する時間は90分とのこと。

なるほど、『ソウ』シリーズはこんなゲーム感覚で進行するホラー映画なのだ。そ

う理解すれば、パンフレットの中で、『ソウ2』『ソウ3』『ソウ4』と続いたダーレン・リン・バウズマン監督や、『ソウ3』で死んでしまったにもかかわらず、『ソウ4』になお登場する(?)ジグソウを演ずるトビン・ベルが、当然のように『ソウ5』を予定しているのもわかるような気が……。

ゲームはその他にも……

『ソウ4』の主たるゲームは、このテレビモニターの声に挑発された(?)リッグ隊長がエリック刑事とホフマン刑事を90分以内に救出することができるかどうかということ。もっとも、エリック刑事とホフマン刑事の救出には、FBI捜査官のストラムとペレーズも動き出すことになるが、この2人の捜査のスピードは……?

他方、ジグソウ亡き後、誰が、どんな狙いで、どのように策動しているのかは知らないが、リッグ隊長に対して仕掛けられたゲームは他にもいろいろあるようだ。ブラッド・ピット主演の『セブン』(95年)でも、犯行現場にいろいろと奇妙な文字が書かれていた。それと同じように『ソウ4』でも、リッグ隊長のリビングルームの壁には「SEE WHAT I SEE (私の見ているものを見ろ)」との文字が。そして、①少女売春を斡旋している女ブレンダ、②3度無罪になった連続レイプ犯アイヴァン、③娘を虐待しているレックスとその妻モーガン、④ジグソウの元妻ジル(ベッツィ・ラッセル)等の写真が。さて、この写真の人物たちは……?

さらに、リビングルームにはフードを被せられた何者かがイスに縛られていたが、フードをはずすとそれはブレンダ。さて、このイスの仕掛けは……? そして、その残忍なゲームの結果は……?

『ソウ4』のスタッフは……? キャストは……?

2004年に『ソウ』の脚本を共同で執筆し、自分たちでアメリカの映画会社に売り込んでアメリカン・ドリームを実現させたのが、ジェームズ・ワン(監督)とリー・ワネル(脚本+主演)のコンビ。このコンビは、『ソウ2』『ソウ3』では原案・脚色・脚本などをこなしつつ、製作総指揮にも回っている。しかし『ソウ4』では製作総指揮に徹し、脚本は新コンビのパトリック・メルトンとマーカス・ダンスタンに託すことに。その他映画の製作に不可欠なスタッフである、プロデューサー、撮影監督、プロダクション・デザイナー、編集、衣裳デザイナー、音楽等も基本的には1~3作、



© MMVII Lions Gate Films Inc. All Rights Reserved.

2～3作を担当したスタッフを結集している。また、キャストも主演のジグソウを演ずるトビン・ベルをはじめ、『ソウ』1～3作ないし、2～3作に出演した俳優たちがズラリ。

ただし『ソウ2』で登場し、『ソウ3』で死んでしまった、ジグソウの後継者となるべきアマダは『ソウ4』では登場しないし、ストラム捜査官やペレーズ捜査官は、『ソウ4』で初登場！ 私が注目したのは、「これはすごい美人！」と思ったジグソウの妻ジル。ジルは『ソウ3』から登場したとのことだが、『ソウ4』ではストラム捜査官らから執拗な尋問を受けるつらい役。パンフレットを読むと、このベツツイ・ラッセルは1963年生まれで既に45歳だが、すごく理知的な感じの美人として強く私の印象に残った。『ソウ5』以降がつくられるなら、私としては彼女のウエイトをもっと増やしてもらいたいものだが……。

🎬『ホステル』や『テキサス・チェーンソー ビギニング』と比べると……？

私はイーライ・ロス監督の『ホステル』(05年)を観た。またジョナサン・リーベスマン監督の『テキサス・チェーンソー ビギニング』(06年)も観た。『ホステル』は拷問道具のラインナップの見事さにおいて『ソウ』と比肩しうるし、『テキサス・チェーンソー ビギニング』は殺し方の残忍さにおいて『ソウ』に比肩しうるが、その両方を兼ね備えかつゲーム性の面白さを備えている点で、やはり『ソウ』はすばらしい。

したがって、『ソウ』シリーズが若者たちを中心に大ヒットし、ジグソウ亡き後も『ソウ4』が製作され、さらに恐怖のエンドレスゲームが『ソウ5』『ソウ6』と続きそうな予感があるのも十分うなずける。こうなると、基本的にホラー映画が嫌いだった私も以降少し宗旨変えをし、『ソウ』シリーズはきちんとウォッチしなければ……。

『シネマルーム』の出版も負けないで

2002年6月の『SHOW - HEY シネマルーム1』の出版以降、私の『シネマルーム』の出版は2008年2月で15巻を数えることになった。近時ハリウッドでは、シリーズものが目立っているが、毎年1本ずつコンスタントに製作・公開しているシリーズものは『ソウ』だけ。私の『シネマルーム』は最近年間3～4冊にピッチをあげてきたから、『ソウ』シリーズに追いつかれることはないと思うが、私の「やる気」がなくなれば、たちまちその出版はジ・エンドになってしまう。したがって、何よりも大切なのは私のモチベーション。そういう視点で『ソウ2』から『ソウ4』までを監督しているダーレン・リン・バウズマン監督の「やる気」をチェックしてみると、やる気満々！ これなら、『ソウ5』以降の継続も全く心配なし。私もダーレン・リン・バウズマン監督の「やる気」に負けないように、『シネマルーム』の出版を継続しなければ……。

2008(平成20)年2月19日記